

若紫卷の垣間見の場面

田
村
俊
介

富山大学文学部紀要第76号
2022年2月
抜刷

若紫卷の垣間見の場面

田
村
俊
介

若紫卷の垣間見の場面

一

目次

第一節 青表紙本系大島本で若紫巻を読む

第二節 若紫巻の垣間見の場面

第三節 橋姫巻の垣間見の場面

第四節 長篇小説の早いほうの章の一つとして若紫巻を読む

第一節 青表紙本系大島本で若紫巻を読む

加藤昌嘉氏は、次のように述べている。

一 本、テキスト―動態としての

プーリストは、どこかで、「教会」は「いわば四次元の空間——その第四の次元は、時[●]なのだが——を占めるようなある建物」である、と書いている。（井上究一郎『失われた時を求めて』）

この「教会」を、「本＝テキスト」と置き換えてもよい。本は、ただの平行六面体としてあるのではない。それは、長い時にわたって、生成し変容し、流動し揺曳しつづけて来、つづけている、時間を孕んだ存在だ。

実際、プーリストの『失われた時を求めて』なるテキストは、唯一不動の、静止的な固物ではない。

彼の死後、その寝室には、厩大な量の、手書き原稿・タイプ原稿・訂正加筆原稿・清書原稿・校正刷、加えて、その付箋、創作手帖・メモ帖、未完Ⅱ未刊の習作などが残された。それらは、決定稿Ⅱ最終完成体に参与した、単なる発展途上の資料体ではない。それらは、個々それぞれに、独自の機能と詩学を包蔵してあるのである。

(略)

今度は、その「『失われた時を求めて』」を、「『源氏物語』」に置き換えてみる。或いは、「プルースト」を、「『源氏物語』」の原作者及び書写者」に置き換えてみる。数多の伝本も、それへの附加・抹消も、あたかも無辺際な『源氏物語』空間の一部のように考えてみるとよい。一千年にわたって『源氏物語』を書きつづけて来た人々を、あたかも一人の作家のように考えてみるとよい。もうそろそろ、確乎たる原態^{オリジナル}を夢想するのはやめにしよう。起源への回帰は抛棄しよう。¹

私は四次元、建築学を全く知らず、『失われた時を求めて』も日本語訳でしか通読していず、その作品の全体像も余り頭に入っていないので、アンドレ・ジッド（一八六九—一九五一）の『狭き門』（一九〇九年）に即して考えてみたい。

『狭き門』の初出は、

『新フランス評論』第一号 四三頁～九〇頁

『新フランス評論』第二号 一四四頁～二〇五頁

『新フランス評論』第三号 二六五頁～二九九頁

で、三回に分けて掲載された。ここに挙げたページ数は、各号毎に付されたものでなく、TONEIの通し番号である。我々がよく知っている『狭き門』はNRF社の『アンドレ・ジッド全集』（一九三〇年代）所収のものである（以下、ジッド全集と略称することがある）。これを日本語訳したものが、岩波文庫や新潮文庫になっている。

この作品は第一章から第八章までは、ローマ数字で仕切られているが、そのあとの「アリサの日記」の部分を私に第九章と名付け、そのあとの部分を第十章と名付けたい。

初出の『狭き門』が全集所収の『狭き門』と比べていかに劣っているかの詳細は、前拙稿「宇治十帖前半とアンドレ・ジッド『狭き

門』²を御覧になっていたのだが、要は、第九章冒頭である。『狭き門』の舞台は、ほとんどがパリを含む北フランスの地であるが、アリサ・ビュコラン（宇治十帖の大君と似た性格）の妹ジュリエット・ビュコラン（宇治十帖の中の君と似た性格）はエドワール・テシエール（ジュリエットの夫になるので、宇治十帖で言うところの勾宮に当たる男性。但し、容姿、性格は勾宮と全く似ていない）と結婚した。エドワール・テシエールは、南フランスの都市ニームとニーム郊外のエーグ・ヴィーヴとに家を持っている。アリサが二五歳の誕生日を迎えるころ、エーグ・ヴィーヴにお客さんに行った。アリサにとっては生まれて初めての旅であった。その誕生日が第九章が始まる時、言い換えれば、アリサの日記が書き始められるときである。第九章冒頭、『狭き門』ジッド全集所収本は、

第一のかたまり（日付は無いが、五月二三日の執筆）

第二のかたまり 五月二四日の日付あり

第三のかたまり 五月二六日の日付あり

であるのに対し、初出は

第一のかたまり（日付は無いが、五月二三日の執筆）

第二のかたまり 五月二三日の日付あり

第三のかたまり 五月二六日の日付あり

である。初出の、第二のかたまりの初めが五月二三日であるのは、第一のかたまりの、

ce 23 mai 188...jour anniversaire de mes 25 ans, je commence un journal

という一節の㊦という数字を見て、ついうっかり、『新フランス評論』の関係者が㊦日を㊦日に書き換えてしまったのであろう。それを、アンドレ・ジッドは、全集が刊行される年、まだ十分元氣だったから、㊦日と所期した通りの日付に直した、と推測される。㊦という異文が生じた理由は、右記の通りでないかもしれないが、いずれにせよ、二つ目のかたまりが五月二十三日の記事だとすると、矛盾が生じる。

わたしは今朝、とても早くからひとりで初めて庭園を散歩し、いろいろなものを観察することができた。

と言う一文がある³。エーグ・ヴィーヴの家に着いたのは五月二三日であつて、その日の朝、しかもとても早い時間に、庭園を散歩できるはずなのである。

一般に、欧米の小説は日本の物語・小説と比べて、自然描写が豊かでない。ところが、フランス生まれフランス育ちのアンドレ・ジッドは、季節の移り変わりに敏感で、作中人物の心理と背景の自然・季節が融合して描かれることもあり、その意味では、庭園の散歩で草木の描写は大切である。その散歩は、どうしても、到着二日目、五月二四日でなくてはならないと意固地に思う私は、初出『狭き門』の物語世界に、ジッド全集所収本に無い機能と詩学を見出すことができない。

加藤氏は、

一つの伝本が次第に権威化され、註釈書の嚮導によって作品論までもが半ば無前提に大勢に就き、結果、撰取された『善本』の周縁に、殆ど読み解かれることのない『異本』が積み上げられることになる。¹

という状況を嫌っておられるようだが、『狭き門』を愛読するものとして、日本語訳書の嚮導によって作品論が半ば無前提にジッド全

集所収本に基づくようになり、結果、初出の『狭き門』は、殆ど読み解かれることがないようになることを強く望む。

以上、『源氏物語』を論ずるのに、最初に、アンドレ・ジッドの作品を持ち出すのは邪道だが、加藤氏への対応であった。

但し、加藤氏の言説も貴重なものである。

私なりに言い換えれば、①第一次稿、②第二次稿、③第三次稿、④第四次稿、……があつて、①や②も、最終原稿とは違う独自の機能と詩学を包蔵してある、という主張であろう。「(略)」の後に、これらを、①紫式部の文章、②紫式部の少し後の人の文章、③②より少し後の人の文章、④③より少し後の人の文章、……に置き換えていることの可否は措くとして、確かに、初出と初版で違つていて、我々がよく知っているのが初版のほうであるとき、初出も「独自の機能と詩学を包蔵して」いるということは本当にあるだろう。或いは初出は初版とほとんど変わらず、しかし、下書きが存在するとき、下書きの物語世界は、初出の物語世界イコール初版の物語世界とは違つて、「独自の機能と詩学を包蔵して」いるということもあるだろう。要は、下書きの価値や早い時期に公刊された文章の価値は、作品によつて違う、一概には言えない、ということである。

そこで、撰取される善本として、若紫を含む多くの巻々については、やはり、それが青表紙本系大島本であることを望む。新見哲彦氏は、二〇一九年一〇月に報道された、新出「若紫」巻について、青表紙本系大島本で「をしあてに」とある箇所が新出「若紫」巻では「をし」である点について、

丁の変わり目で「あてに」を脱落している。(略)新出本が定家本系諸本全体の祖本ではないということも垣間見えよう。

と述べている⁴。このような指摘に導かれて、私は、新出本ではなく、青表紙本系大島本を底本にした校注書を引用テキストにしたい。もっとも、新美氏は、

①果たして現在の定家本系全体の祖本ではない定家監督書写四半本を注釈書の底本にしてよいのか。②すでに言われている大島本

の劣化が改めて確認されたが、巻によって親本も異なり、室町期写本との接触も見られ、劣化部分も多い大島本を注釈書の底本にしてよいのか。③そもそもどのような本を注釈書の底本とすべきなのか。

と述べている。である以上、理想的な、非定家監督書写四半本が出現するまで、若紫巻を引用しての作品論をしてはいけないのであるか。

そこで、念頭に浮かぶのが、『狭き門』である。

Pour moi, qui attends mon cinquième enfant d'un jour à l'autre, je n'ai malheureusement pas pu me déplacer.

(二一〇頁八―一〇行目)

右は、第八章章末、女主人公のアリサが死去した時、ジュリエットが「自分は妊娠していて、パリに駆け付けてアリサの葬式に列席することができなかった」と男主人公ジェローム（アリサたちの従兄弟。宇治十帖の薫と似た性格）と告げる一文である。初出も、同文である（二七三頁七―九行目）。その時身籠っていたのは、cinquièmeと記されていて五番目の子であった。ところが、第十章の比較的初めの部分では、

Deux garçons de douze et treize ans jouaient dans l'escalier ; elle les appela pour me les présenter. Lise, l'aînée

de ses enfants, avait accompagné son père à Aigues-Vives. Un autre garçon de dix ans allait rentrer de promenade, c'

est celui dont Juliette m'avait annoncé la naissance prochaine en m'annonçant aussi notre deuil.

とあって、アリサ死去の際にジュリエットが身籠っていたのは四番目の子であるかのような記述である。初出でも異同がない（二九七頁一八～二三行目）。この子が四番目の子であると仮定すると、子供たちの年齢構成は、次の通りである。

- 一番目の子 リーズ（長女） 一四歳以上
- 二番目の子 一三歳の男の子（長男）
- 三番目の子 一二歳の男の子（次男）
- 四番目の子 アリサ死去の際にジュリエットが身籠っていた子。十歳（三男）

もし、第八章の記述が正しいとすると、以下のようなになる。

- 一番目の子 リーズ（長女） 一四歳以上
- 二番目の子 一三歳の男の子（長男）
- 三番目の子 一二歳の男の子（次男）
- 四番目の子 性別不明。十一歳。（三男、若しくは、次女）
- 五番目の子 アリサ死去の際にジュリエットが身籠っていた子。十歳（四男、若しくは、三男）

この場合、ジュリエットは、四年連続で出産したことになり、不自然である。ありえないことではないが、その場合、ジュリエットが人並外れていたことをどこかに記しておくべきではなかったか。

いずれにせよ、ジッド全集所収本も無傷ではない。第八章に疵があるか、第十章に疵があるか、どちらかである。この点に就き、日本の光文社古典新訳文庫の第十章では、次のような注が付されている。

【258～259頁の和訳本文】

十二歳と十三歳になるふたりの息子が階段で遊んでいた。ジュリエットはふたりを呼び、僕に紹介した。彼らの姉にあたるリーズは、父親と一緒にエーグ・ヴィーグに行っていた。もうひとりの一〇歳の男の子はまもなく散歩から帰ってくるという。アリスの死を伝える手紙のなかでジュリエットが近々出産すると言っていたのが、この男の子だった。

【258～259頁の注】

この子ここではジュリエットの四人目の子供となっているが、第八章末尾のジュリエットの手紙では五人目の子供とされていた。ジッドはこの子供の不一致を見逃したらしい。

女主人公の葬式の際、妹の妊娠が難産であったことは、作品全体の中で重い意味を持つ。従って、その子が五番目の子か四番目の子かは、小さな違いではない。言い換えれば、初出の『狭き門』とジッド全集所収の『狭き門』は、共に、小さくない疵を内包している。にもかかわらず、『狭き門』はノーベル賞受賞の大きな要因となるほど、世界中の多くの読者を感動させている。何賞を受賞したかは作品の真価とあまり関係なからうが、ジッド全集所収本で何度か通読した私自身の評価として、『狭き門』は、日本の『源氏物語』と並んで世界最高峰の文学作品である。

中編や長編の作品は、本文が幾らか疵付いていても構わないではないか。

もっとも、疵があっても構わないと言うのにもおのずと限度がある。名前は知らないが『義経記』（全八巻）を書いた人は、巻七が第二系列本を底本とする新編日本古典文学全集本で読まれる事態を決して納得していないはずである。第一系列本も現存しており、岩波書店発行日本古典文学大系『義経記』の底本となっているのだが、仮に第一系列本が現存していなかった場合、我々後世の読者は、第二系列本を底本とした校注書で巻七を読むことになったであろう。第二系列本で巻七が読まれるぐらいなら、巻七が読めない方がましだ、と思うはずである。それくらいの悪文である。ただ、一九三〇年代、まだ老年期に入ったばかりか入らなかったかのアンドレ・

ジッドはNRF社のジッド全集の『狭き門』本文に、著しい不満を持ったという話を聞かない。

『源氏物語』も、十年後か二十年後に、理想的な、非定家監督書写四半本が出現するかもしれない。その写本の本文から見れば、青表紙本系大島本も、二〇一九年一〇月に新出した「若紫」巻も、幾つかの疵を持ったものだということになるだろう。しかし、その疵を持った本文でも、充分に研究し甲斐がある文学作品たり得ている。

第二節 若紫巻の垣間見の場面

若紫巻の垣間見の場面を引用する。引用テキストは、新日本古典文学大系（略称 新大系）である。私は、第一巻三一七頁注三八をはじめとする幾つかの注には強い不満を持っているが、釈文作成に当たって、二つの方針を取っている。一つは、

底本【若紫を含む多くの巻で、青表紙本系大島本】を尊重し、むやみに手を加えない。

というもの、もうひとつは、

どうしても通じない場合には、底本を改訂する。

というものである。この二つの方針のいずれをも支持したい。注釈についても、幾つかの注以外のものについては、優れたものが多い。そのことについては、前拙稿「源氏物語―巻論・人物論・表現論を中心とする論を除く―」⁶でも触れて置いた。

白き衣しろきぬ、山吹ふきなどのなへたる着て走り来たる女子こ、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生おい先見えてうつくしげ

なるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうにゆらくとして、顔はいと赤くすりなして立たり。

「何事ぞや。童べと腹立ち給へるか」とて尼君の見上げたるに、すこしおぼえたところあれば、子なめりと見給。「雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠のうちに籠めたりつるものを」とていとくちおしと思へり。このゐたる大人、「例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとおかしうやうゝなりつるものを、烏などもこそ見つくれ」とて立ちてゆく。髪ゆるゝ、かにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とこそ人言ふめるはこの子の後見なるべし。

尼君、「いで、あなおさなや。言ふかひなうものし給かな。をのがかくけふあすにおぼゆる命をば何とおぼしたらで、雀慕ひ給ほどよ。罪得ることぞと常に聞こゆるを、心うく」とて、「こちや」と言へば、つゐゐたり。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたるひたいつき、髪ざしいみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給。さるは、限りなう心をつくしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるゝなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

〔「若紫」第5段落〕

尼君の「童べと腹立つ」について、新編日本古典文学全集（以下、新全集と略すこともある）は、子供たちといさかいをなさつた、と訳し、新潮社発行日本古典集成（以下、集成と略すこともある）は「けんかなさつた」と部分訳している。けんかをする、といさかいをすることは意味の違いがないだろう。

そこで、「腹立つ」の用例を調べてみよう。「いさかいをする」の意になるものはあるだろうか。

○【按察使の大納言は】「人がらは、げに契ことなめれど、なぞ時のみかどのことゝしままで婿かしづき給べき。また、あらじかし、九重のうちに、おはします殿近き程にて、たゞ人のうちとけとぶらひて、はては宴や何やとめてさはがるゝことは」など、いみじく識りつぶやき申給けれど、さすがゆかしければ、まいりて心のうちにぞ腹立ちぬ給へりける。

紙燭さして歌どもたてまつる。文台のもとに寄りつゝ、をく程のけしきは、をのゝしたり顔なりけれど、例のいかにあやしげ

に古めきたりけんと思やれば、あながちにみなも尋ね書かず。

(略)

世のつねの色ともみえず雲居までたちのぼりたる藤浪の花

これやこの腹立つ大納言のなりけんと思え。

〔宿木〕。一〇七〜一〇八頁

所謂紅梅大納言を主語とした、二つの用例である。紅梅大納言は「腹立」っているのであるが、女二宮の婿になった薫に対しても、女二宮の婿に薫を選んだ今上帝に対しても、いさかきをしてはいない。口の中でもごもごと、議っているだけである。そして、おそらく、腹立ちが表情に現れていたのではなからうか。

○【雲居雁の】起き上がり給へるさまは、いみじうあひ行づきて、にほやかにうち赤み給へる顔、いとおかしげなり。(夕霧)「かく心をさなげに腹立ちなし給へればにや、目馴れて、この鬼こそいまはおそろしくもあらずなりにたれ。……」

〔夕霧〕。第四卷一四四頁

○【近江の君の】腹立ち給顔やう、け近くあひぎやうづきて、うちそばれたるは、さる方におかしく罪ゆるされたり。

〔常夏〕。第三卷二二〜二二頁

どちらも、「腹立つ」の意に取れるが、「いさかきをする」意をこの語自体から看取できない。しかし、『源氏物語』の「腹立つ」は、顔に表情が現れるときに使われることが多いのではなからうか。

いっぽう、「いさかふ」という言葉の用例は、

かの殿【常陸介邸。新大系注四六より】には、けふもいみじくいさかひ給けり【はげしく言い争いなされたとか。新大系注四七より】。たゞ一所の御上を見あつかひ給ふとて【浮舟お一人のことばかりお世話なさるうとして。以下、常陸介の憤ることば。新大

系注四八より】、わが子どもをばおほし捨てたり。

（第五卷一五九頁）

などがある。常陸介は、中將の君と「いさかふ」という行為の後、腹を立てているようである。

尼君も、本当は、

童べといさかひて腹立ち給へるか

と言うべきであつた。しかし、尼君は、「いさかふ」を省略した。それは、先週も先々週も、紫上が「童べ」といさかいをしたから、言わなくても分かるからであろう。この部分の訳は、

童べと（いさかいをして）腹を立てていらつしやるの。

とすべきであつて、新全集下段

子供たちといさかいをなさつたのですか

や、『源氏物語鑑賞と基礎知識 若紫』⁷の、

子供たちとけんかをなさつたのですか

のように、原文の「腹立ち」が完全に「いさかひを（する）」「けんかを（する）」に入れ替わってしまつて、腹を立てる、若しくは、それに近い概念が、現代語訳に残らないのは残念である。

それにしても、紫上にとつては分かり易い詞であつたにしても、読者にとつては、分りにくい。紫式部が、尼君に、敢えて言葉を略させたのは、あまりかしこまつた、整つた文章であると、不自然だと感じさせる懸念があつたからである。

「あざ―す」は、初め、どういう意味が分からなかつた。今でも、「ありがとうございます」がどのようにして「あざ―す」に転化したのか、国語の通時的考察に基づき説明せよと言われても、私にはできない。しかし、それでもやはり、平成の小説で若者が気の置けない先輩に掛ける言葉として、「あざ―す」の方が文学的に良いか、「ありがとうございます」の方が良いか、答えはおのずと明らかである。

若紫巻の垣間見の場面でも、「童べと腹立ち給へるか」にするほうが文学的に良いか、「童べといさかひて腹立ち給へるか」にしたほうが良かったか、答えはおのずと明らかである。「童べと腹立ち給へるか」の方が良い。このほうが、気の置けない身内同士の会話として、自然である。新全集も、次の紫上の詞の注として、「この文は連体形止めで、次の文と倒置の関係になる。会話らしい会話である。」と言っている。

雀の子をいぬきが逃がしつる。伏籠ふせごのうちに籠こめたりつるものを

犬君の失態を責めるかのようなこの言葉に同調したのが、少納言の乳母の次の詞であつた。

例の心なしの、かゝるわざをしてさいなまるゝこそいと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとおかしうやう／＼なりつるものを、烏などもこそ見つくれ

このうちの後半について、新全集は、

以下も語順が普通でなく、かえって会話らしい。

と注している。賛成したい。ただ一つだけ付け加えれば、「会話」とは気の置けない身内同士の会話のことである。気の置けない身内同士の会話としては、破格の、整っていない言葉の方がかえって文学的に良いのである。

尼君：童べといさかひて腹立ち給へるか

紫上：雀の子を伏籠ふせごのうちに籠めたりつるものを、いぬきが逃がしつる。

少納言の乳母：やう／＼いとおかしうなりつるものを、いづ方へかまかりぬる。

よりも、ずっと文学的に良いと私は思う。

引用した部分の直後に、僧都も登場する。僧都は、

この世にの、しり給ふ光源氏ひかる、かゝるつゐでに見たてまつり給はんや。世を捨てたるほうしの心ちにも、いみじう世のうれへ忘れ、
齢延ぶる人の御ありさまなり。いで御消息聞こえん
(一五九頁)

と言ひ、新大系は、

注二三 僧都の言。世間において評判でいらつしやる光源氏を。簾を通して声だけが聞こえる。

としている。そして、新全集は、

「ののしる」は、やかましく評判する意。「たまふ」は光源氏に対する尊敬。「ののしられたまふ」と同じに考えてよい。

と注しているが、何故、「ののしる」を「ののしらる」と同じに考えてよいのか、『源氏物語』の他の巻や同じ巻の他の場面から用例を引いて説明したり、ということがなされていない。

私は、本当なら「この世にの、しられ給ふ光源氏」と言うべきところ、受身の助動詞「る」を省略したのだと思う。

令和二年末から三年にかけて、「新型コロナウイルスのワクチンを打つ」と言う表現がよく使われた。これは、糖尿病患者の一部の方々が、自分で自分の皮膚にインシュリンを打つこと、そのことが国民に或る程度知れ渡っていること⁸を念頭に置くと、誤解を与えない危険な表現である。しかし、そこは、何となく、通じる時は通じるのである。（この原稿の下書きを書いて居た頃と、それから数カ月経った今とでは、新型コロナウイルスを巡る状況が変わってきている。下書きを書いていた頃、「薬剤師がワクチンを打つ」「救急救命士がワクチンを打つ」と言えば、①薬剤師や救急救命士が医者や看護婦にワクチンを打ってもらう、の意にしか取れなかった。しかし、その後、国民のワクチン接種を早く終わらせたい、という政府の意向と、打ち手不足の問題が相まって、②薬剤師や救急救命士が打つ、の意であるのか、①の意であるのか、分からなくなった。しかし、本来、注射を打つのは医者か看護婦であるという前提に基づいて、私が言わんとしていることを理解していただきたい。現に、二〇二一年六月上旬、救急救命士が打つことに、経験不足を不安視する声もある）。「歯を抜く」「手術をする」「髪を切る」も、本来、受身の助動詞か「てもらう」かを付け加えなければ誤解を与える表現であるが、あまり、文法的に正しい文章にすると、会話が固くなるものである。僧都も、気の置けない尼君、お付きの女房の前にして、畏まった表現をしなくなかったのだろう。

作品の冒頭は、作者の趣味にも拠るが、固い表現を取ることが多い。『しのびね』の冒頭、

その頃、時の有職いっしょくと世にののしられ給ふは、内大臣うつのおほいらの四位の少将とかや、まことに光りかかやき給ふ御様さまは、明け暮れ見奉る人さへあかぬ心地するに、ましてほのかにも見奉る人のあぢきなき思ひの種たねとなるはことわりぞかし。

は、「ののしられ給ふ」主人公、である。

桑原博史氏「源氏物語と中世物語」第三節では、

「時の有職とののしられ給ひしは」とあるのは誤用である。源氏物語若紫巻における用例の「この世にののしり給ふ光源氏」の場合は、「ののしる」と言う語自体に評判されるといふ受け身の意があるから尊敬語「給ふ」をつけて光源氏の状態とした。しかしここでは、「ののしる」の語の意味を誤解して、受け身の助動詞「る」を加えたのであらう。この物語のあとの方でも「都にめでののしられ給ふ大殿の四位の少将殿」とあって、「ののしる」の語の意味をとりちがえていることは、はっきりしている。

この説は、新全集『源氏物語』の注を鵜呑みにした、と言っても、この項目は、昭和に刊行された日本古典文学全集（以下、全集と略すこともある）とほぼ同文であるから、もしかしたら全集の注を鵜呑みにした桑原氏が、『しのびね』について間違った注釈をしたと、考えてよいだろう。『しのびね』の文章は、誤っていない。『しのびね』作者は、文法的に正しい、畏まった表現をしているだけである。文法的に誤った詞を発したのは、『源氏物語』の僧都である。紫式部が、碎けた空気を醸し出すために、僧都の詞を文法的に誤ったものにわざとしたのである。

尼君、紫上、少納言の乳母、僧都たちが、気心を許した者同士で、普段着で、飾らない言葉使いをしているため、光源氏は、さぞかし、わくわくしたのであらう。『源氏物語』の垣間見の場面では、垣間見をする者は、盗み見をするだけでない。盗み聞きもしている。

第三節 橋姫巻の垣間見の場面

橋姫巻、薫は八の宮のもとへ通う。その三年目の秋、八宮の留守中、大君と中の君を垣間見る（第12段落から第14段落迄）。

あなたに通ふべかりけるすひがひの戸を、すこしをしあけて見給へば、月おかしきほどに霧わたれるをながめて、簾をみじかく巻き上げて、人／＼ゐたり。簀子に、いと寒げに、身細くなえばめる童一人、おなじさまなる大人などゐたり。

うちなる人一人、柱にすこし隠れて、琵琶を前にきて、撥を手まさぐりにしつゝゐたるに、雲隠れたりつる月の、にはかにいと明かきし出でたれば、「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」とて、さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかなるべし。添ひ臥しつる人は、琴の上にかたぶきかゝりて、「入る日を返す撥こそありけれ、さま異にも思ひをよび給ふ御心かな」とて、うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。「をよばずとも、これも月に離るゝ物かは」など、はかなきことを、うちとけの給かはしたるけはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうおかし。

昔物語などに語り伝へて、若き女房などの読むをも聞くに、かならずかやうの事を言ひたる物の隈ありぬべき世なりけり、と心移りぬべし。

〔「橋姫」第14段落〕

「をよばずとも、これも月に離るゝ物かは」には、

中君の言。違つているとしても、この撥も月に縁のないものかしら。琵琶の撥を収める箇所を「隠月」と呼ぶところからの機智である。

という注が付され、同じく中の君の詞である「扇ならで、これしても月は招きつべかりけり」については、

……手に持った撥が扇に似ているところから機知を働かせた戯れ言。扇で月を招く故事は未詳、……

と言う注が付されている。この「扇で月を招く故事は未詳」について、吉澤義則氏は、より詳しく説明していた¹⁰。

琴琵琶の話ついでに、古来釈き誤つてゐる橋姫巻の一節を考えて見たい。

うちなる人ひとり、柱に少し居がくれて琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゝ、ゐたるに、雲がくれたりつる月の俄にいと明るさし出でたれば、扇ならでこれしても月は招きつばかりけりとて、さしのぞきたる額いみじくうたげに匂ひやかなるべし、そひふしたる人はことの上に傾きかゝりて、入る日を返す撥こそありけれ、様ことに思ひおよび給ふ御心かなとて、うち笑ひたるけはひ今少しおもりかによしづきたり、及ばずとも此れも月に離るる物かはなど、はかなきことをうちとけたまひかはしたる御けはひども

湖月抄も、その主として拠つた細流抄も、この一節の姉妹を取違へて釈いてゐる。父宮の授けられたのは姫君に琵琶、中の君に箏であつた。こゝの誤釈はその事実起因してゐるのであるが、こゝは各本芸をとりかへて遊んでゐられるのである。こんな遊樂は今日玄人仲間にもよくあることで、年に一度位はラジオ放送で聞かされることがある。父君参籠中の淋しさを紛らせる為の姉妹の君の遊樂である。記者が「はかなきことをたまひかはし」と書いてゐるのは、その事実を説明してゐるのである。だから、この会話は、とりとめもない即ちはかなき性質のものであるのに、それを真面目に扱はうとした為に不審が生じたわけである。即ち扇を以て日を招き出した故事やら、撥を以て月を招きかへした故事やら、古来その典故問題がやかましく詮議されたのであつた。今湖月抄の頭註を引用して見よう。

【略】

かうした詮索が繰返されたのであるが、もとよりこゝは戯談の交換である。月を招くも日を返へすも出鱈目である。引用文にあるやうに類似の故事があつて、それからのおもひ付きではあつたが、結局噴出さうが為の話柄である。典拠などと真剣になつて考

證すべきところではないのである。「様ことに思ひおよび給ふ御心かなとて、うち笑ひたる」とあるのを注意して読んで見れば、この応答が笑話に過ぎないことは明かであらう。今も昔も若い処女のほがらかさに変りはない。

ここで言われているでたらめさ、ほがらかさ、砕けた空気は、

○「けんかする」に当たる言葉省略する尼君の言葉使い

○倒置法

○受け身の助動詞の省略

と通い合うところがあるのではなからうか。

男女の事よりもどちらかと言えば仏教に関心があった薫が、「心移」って、大君との恋が、今後始まることになる。

第四節 長編小説の早いほうの章の一つとして若紫巻を読む

橋姫巻は、現在では、宇治十帖の始発の巻だと認識されている。しかし、私も、宇治十帖の構想が初めから、現在ある宇治十帖のようなものであったとは考えていない。藤村潔氏が言われるように、宇治十帖は、大君の死と中の君の入水で終わる予定であったのだらう¹¹。

しかし、その大君への恋の物語の幕開けとして、垣間見の場面があった。

同様に、若紫巻の垣間見の場面も、光源氏の、一番大切な女性と歩む数十年の生活の幕開けであった。

私は『源氏物語』前編に関しても藤村潔氏のお考え¹²を受け継いでおり、長編始発説を取っている。長編始発説というと、紫式部が「い

づれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、……」と書き始めた時、浮舟の尼姿を思い描いていたのか、と訊かれたことがあったが、そういう意味ではない。第四一帖「幻」で、いや、だいたい四十番目ぐらいの巻で光源氏が出家と死を間近に感じ取っているところまで、構想を持っていた、という意味である。紫式部は、光源氏十代の巻々、二十代の巻々、三十代の巻々、四十代の巻々のそれぞれで、だいたいどのような出来事が起こるか視野に入れながら、長編・光源氏物語を書き綴っていた、と考える。私は藤村氏ほど数字にこだわらないので、例えば、二十代の物語とは、光源氏三十二歳までと認識しているが、約十年間を一括りにして、それぞれの十年間には何が起こるかをあらかじめ構想していたという考え方は、全く藤村氏を引き継いでいるつもりである。紫式部は、長編・光源氏物語を通して、十代で次々と恋する女性を変えていっても、二十代の半ばで社会から放逐され、二年半の苦渋の時期を経れば、その後は、一人の女性だけに愛情を注ぎ、彼女が死んだ後は精神的に死んだも同然の日を送る（二年半の苦渋を経て、人間的に成長するという話型を、藤村氏は、よく、貴種流離譚という言葉で説明していた、四十代で、約十五歳年下の青年に自分の權威を失墜させかねない行動をされると、十代や二十代に犯した自分の罪を棚に上げて、心が壊れてしまうような譴責を与えてしまう、そのような男の人生の全体像を、光源氏という一人の男性に託して描きたかったのではなからうか。光源氏が一番大切な女性に死なれたとき、雁に姿を変えている幻術士に、彼女の居場所を探してほしいと頼んでいる。

おほぞら
大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ玉のゆくゑたづねよ

〔幻〕。二〇三頁

この和歌は、桐壺巻の「尋ねゆくまぼろしもがな……」と呼応するか、と新大系が施注する。若い頃、父を裏切る行為をした光源氏が、自らの死も二、三年後に控え、父と同じ発想を取るのである。光源氏は、桐壺帝が「尋ねゆくまぼろしもがな……」と詠んだということを知っていたと考える形跡がない。知らずに「大空をかよふまぼろし……」と詠んだからこそ、読者には、血のつながりが印象深く感じられることになる。紫式部が桐壺帝に「尋ねゆくまぼろしもがな……」と詠ませたとき、五二歳の初冬であったかどうかは知らず、だいたいそのくらいの年齢で、同じような発想のことを光源氏に言わせる予定でなかったとはとても考えられない。

その上で、西暦九七一年から九九一年までという近い時代に成立した『うつほ物語』¹³に準拠して、正伝（紫上系 プラス 所謂第二部の卷々）と傍流（玉鬘系）の二重構造を意図的に作り上げた。その根拠が、正伝の巻の一つである葵の、

かのいさよひのさやかならざりし秋の事など、

（第一卷三一七頁一五行目）

という一節が傍流の巻の一つ・末摘花を踏まえている事実である¹⁴。ここには、注三八が付けられていて、

十六夜の月がはつきり見えなかつた秋のこと。源氏が末摘花を訪れ、頭中将に見つけられたのは春であつた。↓末摘花二〇九頁。

と記されているが、意味不明である。前拙稿「かの十六夜の女君―葵卷晩秋の新解釈―」¹⁴で述べた通り、

末摘花の顔がはつきりとは見えなかつた秋の新枕のことなんか。

と注すべきである。

短編始発説は、例えば、玉上琢彌氏『源氏物語研究』¹⁵、新潮日本古典集成（略称：集成）第一巻に付された次の解説などに表れている。

作者は始め長篇にするつもりはなかつたのだ。もともと「帚木」の並びなり「若紫」一帖なりの短編であつた。それが世評のよさに励まされ、読者の続編を求める声に動かされて、つぎつぎと書き進んで行つた。作者自身はつきり長編としてまとめる決心がついたころ「桐壺」が増補され、やがて「藤裏葉」の結末が作られたのであろう。（『源氏物語研究』七九頁）

成立事情を知って始めて作品が正しく理解されたり、成立事情から作品の本質が規定されることも、時にはやはりある。たとえば夏目漱石の『吾輩は猫である』は、作者自身一回で完結のつもりであった。ところが世評噴々で高浜虚子に勧められて第二回を書いたが、この時もこれぎりのつもりであったという（たとえば小宮豊隆氏著『夏目漱石』五〇六頁参照）。こういう成立事情であったことも、あの作品が「随筆小説」といわれもするようになった理由の一つと考える。私は『源氏物語』についてもこれに似たことを想像するのである。

（『源氏物語研究』四五頁）

……【第二帖帚木から第十一帖花散里について】一卷ごとに積み上げて主人公の一生を語るといふ形は、『伊勢物語』の小段の排列を想起させるものがある。

若紫の巻は、桐壺の巻は、桐壺の巻を物語の発端の形式を整える巻とすれば、物語の実質的な第一話としての意味を持つ。その成立は、おそらく帚木、空蟬、夕顔、末摘花よりは早いだろう。

（集成解説）

私も、第五帖若紫は、第六帖末摘花より成立が早いと思うが、その他の面については、信用できない。単なる感想文である。第五帖若紫に、第四帖夕顔の主要登場人物が登場せず、彼女たちが話題に上ったり回想されたりしないから、若紫巻と夕顔巻とは互いに独立した短編小説だというのであろう。

しかし、第十二帖須磨の冒頭近く、光源氏が須磨に旅立つに当たって、第五帖若紫の女主人公、第七帖紅葉賀の女主人公、第八帖花宴の女主人公、第九帖葵の女主人公、第一帖花散里の女主人公と、手紙や対面で別れを惜しんでいる。逝去した場合は、その遺族に別れの挨拶に行っている。第十帖賢木の女主人公は、一応、六条御息所と見做しておくが、彼女は都にいなかったもので、後の段落で、互いに和歌二首ずつのやりとりをしている。ところが、第二帖帚木の後半の女主人公、第三帖空蟬に初登場した女性（軒端の萩）、第四帖夕顔の女主人公、第六帖末摘花の女主人公は全く登場せず、手紙のやり取りもない。では、これら四つの巻の女主人公は、作中世界に存在していなかったのかと言うとそのようなことはない。第九帖葵の時点では、存在していた。従って、第十二帖の時点でも存在

していた。存在していたにもかかわらず、紫式部が、意図的に、登場させなかったのである。

だとすれば、第五帖若紫に、夕顔が、はっきりと名前に近い言葉で記されて話題に登ることがなく、彼女が回想されることもなく、彼女の遺族が登場することがないのも、紫式部が、意図的に、そうしたのである。

長編始発説という言葉が奇妙であるのは分かっているが、これは、短編始発説という言葉に対抗するためである。短編始発説は、完全否定されなければならない。玉鬘系十六帖後期挿入という事実が、事実としては否定されるとすれば、それと同じ程度に、短編始発説は、否定されるべきものである。藤井貞和氏も、第四帖夕顔の巻の時点で、(成人した)玉鬘の物語は予定されていたと述べている(『源氏物語の世界』第六節¹⁶)。繰り返すが、藤村氏や私は、第四帖どころか第一帖の時点で、だいたい四十番目ぐらいの巻の構想はできていたと考える立場であるが、百歩譲っても、夕顔と光源氏の恋愛を語る上で、夕顔の女兒の存在は必要ではなく、紫式部は夕顔に似ず大柄な彼女を求婚譚の主役にする構想を思い描いていたに違いない。例えば、『古代物語研究序説』¹⁷二四六頁でも、「夕顔の物語を書いたとき、作者は将来の夕顔の遺児の役割を、はっきりと構想していた」とある。

集成解説の「一卷ごとに積み上げて主人公の一生を語るという形は、『伊勢物語』の小段の排列を想起させるものがある。」についても、たしかにそのような読み方もできないはないが、『伊勢物語』では、各章段ごとにオチが付いている。若紫巻全体を読むにしても、巻末でオチが付いているとは見做せない。若紫巻第6段落だけを一つの段落として読むにしても、オチが付いているとは見做せない。第6段落での光源氏の思いは、次のように記されていた。

○ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給。

○かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

「ばや」は、主語が一人称のときの願望の助詞である。今後、こうして行きたい、という心内文が、一つの段落の結末としてふさわしいだろうか。

短編始発説と対立するように思われる研究書として、工藤重矩氏『平安朝の結婚制度と文学』¹⁸がある。

紫上の呼称を概観すると、若紫巻で登場してしばらくは、「若草」「紫のゆかり」など、藤壺のゆかりとしての名を以て呼ばれる。ところが、葵上の死後、実質的な妻となるに及んで「紫のゆかり」を連想させる呼称は用いられなくなる。賢木巻で藤壺を出家せしめることで源氏と藤壺と男女の関係の可能性を断ち、源氏の唯一人の配偶としての紫上の立場を固めてゆく(本書第二章の2(1)光源氏の結婚)。その同じ意図が、藤壺を想起させる「紫」系の呼称を避けさせたのであろう。藤壺のゆかりとしてではなく、紫上その人として源氏と結びつけてゆこうとしているというべきであらう。

次に選ばれたのが「対の上」である。紫上は二条院の西の対に住んだので、この呼称は一見自然なものと感じられるが、2「紫上は妾である」に述べたごとく、実は直截に「妾」であることを意味する呼称でもある。召人かと思われたほど正式でない結婚により出発した紫上としては、「対の上」の称も一定の地位が確立したことを示すものではあるが、源氏の妻という絶対的基準からすれば、嫡妻にあらざる者と呼ぶ称にすぎない。(中略)

六条院の造営は対の上の呼称を廃止する結果をもたらした。それが仮に二条東院であったとしても、対の上を別の呼称に切り替えるきっかけとして、殿移りが必要なことであったのであろう。六条院に移ってからは、「春の上」「南の上」が呼称の中心となる。これらは「北の方」「対の上」などのような、妻としての格を表現する呼称ではないので、紫上の妻としての立場がどのようなになったか、呼称からは判断することができなくなった。作者は、判断できない呼称を与えたのだと言うこともできよう。

地の文ではそのような非格の呼称を用いる一方で、会話文では「殿の上」(右近↓玉鬘の乳母。玉鬘3・1〇七頁)【なお、工藤氏が引用テキストにしているのは、小学館発行日本古典文学全集本】、「大殿の北の方」(髭黒大将・北の方。真木柱3・三五三頁)という嫡妻にあたる呼称を用いさせている。六条院の春の殿に移ったからといって、紫上の社会的立場がそれで嫡妻に変わったというわけではないが、世間の者は紫上を「北の方」とみなしたということ、紫上がいかに嫡妻であるかのような印象を、読者にも与えることになる。作者は呼称にそのような操作を加えることで、六条院の女主人が「対の上」と呼ばれるべき立場であったこ

とを曖昧にしようとしたのであろう。

ところが、これと矛盾することに、梅枝・藤末葉巻には再び「対の上」が用いられている。玉上『評釈』はこれを若菜巻の女三宮降嫁の構想に備えるためと説明している。藤末葉巻の時点でも、紫上はけっして嫡妻ではないのだということをさりげなく確認して、嫡妻女三宮の降嫁の伏線としたということで、玉上氏の解釈に従ってよいであろう。

その若菜巻では、地の文でも会話文でも「対の上」「対」と呼ばれる。（後略）

（一一三―一一六頁）

長くなるので途中を省略し、また、引用を途中でやめてしまったが、中略と後略の部分も併せて、『源氏物語』前編の全体を俯瞰したすぐれた説である。

これに対し、非青表紙本、若しくは、非青表紙本系大島本のどこその巻で、地の文での「北の方」の呼称があるから、と工藤氏への反論が提出されるときには、その写本の本文の性格がどのようなものであるか検討しなければならない。我々は、吉岡曠氏『源氏物語の本文批判』¹⁹などに拠り、青表紙本の、若しくは、青表紙本系大島本の相対的優秀性、相対的古態性を知っているから、それを底本にした校注書を引用テキストにした工藤氏の仮説に相対的信頼性を持っている。

紫上は、第九帖葵、葵上の死後、実質的な妻となるに及んで、「紫のゆかり」を連想させる呼称から脱却した。もし、第八帖以前の巻々が、それぞれに独立した短編小説として執筆されたとしたら、そこで用いられた「紫のゆかり」を連想させる呼称から、それらの巻々では、紫上が藤壺の身代わりに愛されている、という印象が読者に与えられることになる。それは紫上にとって不名誉、というより、紫式部にとって不名誉である。古代前期文学からの伝統に基づき、不倫、即ち、一人の女性が二人の男性に愛されることにこのほか厳しかった紫式部にとって、光源氏の藤壺への恋を肯定的に描いたとされることは、不名誉であつたろう。「紫のゆかり」を連想させる呼称は、第九帖後半以降、脱却する予定で、用いられていた。

また、工藤氏は、同じ著書の中で、次のように述べている。

恋愛小説としての『源氏物語』は、源氏の妻（嫡妻・正妻）の座が空白であることを展開の軸としている。源氏の妻の座に座り得る女性を次々と登場させては退けることで、源氏の恋を語り、間接的に紫上への愛情を語る構造に作られている。しかし、紫上の地位を安泰なものにしようとすれば、それらの女性が決して源氏と結婚しない設定にしなければならない。結婚すれば、妻でない紫上は、目に見えるかたちで「妾」となるからである。賢木巻では、六条御息所・朧月夜尚侍・朝顔斎院が源氏の前から遠ざけられた。左大臣の娘は、葵上が死んだ。右大臣の娘は、朧月夜尚侍である。内親王はいない。それゆえ女王である式部卿の娘が特に斎院に卜定されたのである。大臣家の娘もいない。内親王も女王もいない。これで源氏と妻（嫡妻）として結婚し得る女性は誰もいなくなった。結婚問題について、あるいは紫上のあやうい立場を護るために、作者の用意は驚くほど周到である。逆に言えば、そうしなければならぬほど、紫の上の立場は危ういのである。こうして、妻でない紫上はやつとひと安心できる環境におかれた。

しかし、恋愛関係においては今一人最も強力な敵がいる。藤壺である。源氏と藤壺とは結婚という事態はありえないが（史実にも天皇崩御の後に臣下に配された例はあるが、藤壺の場合には皇太子の母であるから、その可能性はない）、男女としての交渉の余地があることは、物語のヒロインとしての紫上には危険なことである。その危険が藤壺の出家で遮断された。（六七～六八頁）

この見方は、後の『源氏物語の結婚』²⁰で詳述され、九三頁と「はじめに」のv頁で図示されているが、やはり『源氏物語』前編の全体を俯瞰したもので、私にも魅力的であった。藤壺は、恐らく第九帖後半よりも後のどこかの巻で出家する予定があり、その上で、第五帖などで光源氏と恋愛していたのであろう。

だが、工藤氏の考えは、次の一点で私と違う。（新しいほうの著書から抜粋する）

○紫の上と源氏の愛情の物語は、藤裏葉巻の大団円で終わる予定だった。ところが、好評のゆえにか、紫式部は『源氏物語』の続きを書くことになり、若葉巻以降を構想した。

○親の庇護もなく、正妻でもなく、子も生まなかつた紫の上が、ついには正妻に等しい社会的待遇と幸福とをつかむに至る物語

(藤裏葉巻まで)として構想された。

ところが、好評のゆえか、第二部(若菜上巻、幻巻)が構想され、その始発にあたる若菜上巻で、光源氏は女三宮と再婚し、女三宮が正妻となった。

(「はじめに」のiv頁)

○明石の君の当初の役割は、娘を紫の上に渡した時点で終わった。後は紫の上とも波風立てず表に出ず、静かに姫君の世話を行えばよいのであったが、新たに若菜巻以降が構想され、物語内の時間が延び、明石の姫君は女御となる。そうなると、女御の実母という立場は重いから、源氏はあらためて、出過ぎるな、立場を忘れるなと釘をささざるを得ないこととなった。(一七六頁)

私は『うつほ物語』の型にはめて『源氏物語』前編が書かれたと考える立場であり、第二〇帖樓の上下の後半が月並み記事の体裁を取っているのと月並みの幻巻との照応、また、『うつほ物語』の主として後半に見られる、「〇〇上」「〇〇中」「〇〇下」の巻々、及び、「〇〇上」「〇〇下」の巻々を踏まえて第三十四帖、第三十五帖が、若菜上、若菜下と名付けられ、かつ、どちらの巻でも一巻の量が多いと考えている²¹。光源氏物語の大尾が紫上追悼の巻になるのはいいとして、それが月並みの体裁になるのは、物語内部からの要請ではない。自然を愛でるにしても、紫上程特定の一つの季節に限定して自然を愛でた人はいない。であるから、紫式部は、光源氏に、五十二歳の春、紫上の生前の春の日の姿を回想させるだけでも良かったはずである。『うつほ物語』のほうには、大尾の巻を月並みの体裁にする内的必然があった。春夏秋冬ならぬ春夏秋冬の自然を背景にした琴の演奏を第一主題として来た、というものである。紫式部は、紫上と違って、春夏秋冬の自然をバランス良く愛でる人だった。紫式部の目から見て、やや冬の自然を語ることが少ないというのは、文学史上最も自然を大切にした『うつほ物語』に共鳴し、その第二十帖樓の上下の後半に合わせて、幻を月並みの巻にしたのである。一般に欧米の小説と比べて、日本の物語・小説は、季節の移り変わりに敏感で、自然描写が豊かであるが、それは『うつほ物語』が切り開いた道であり、その後、『うつほ物語』よりも後世への影響力が大きい『源氏物語』も歩いたものであった。

しかし、百歩譲って、第二部の構想成立が工藤氏の言う通りだとしよう。その場合でも、やはり、若菜巻の垣間見の場面は、後に、第一二帖須磨で、柱隠れに涙を紛らわす彼女の姿²²と合わせ読まれるべきものだと言っている。若菜巻の垣間見の場面は、読者に

新鮮な感興を催すことがあっても、それだけで終わってしまう。『枕草子』²³から、雀の子を飼うのは若い女の子たちのあいだで流行していたことが推測され、だとすれば、この場面だけで読むなら、あまりにも平凡ではないか。

須磨第9段落と、それから一四年後の若菜上第35段落に共通するのは、悲しみを抑制し涙を隠す美学である²⁴。日本の文化、芸術、文学の中によく見られ、一つの型として定着もしている、と聞いたことがある。しかし、紫式部がそれ以前の文学、文化、芸術から学び取ったのではなく、紫式部が須磨第9段落と若菜上第35段落とを書いたから、悲しみを抑制し涙を隠す美学がその後、日本らしさとなって行ったのである。

悲しみを抑制する行為は、必ずしも、褒められたものではない。眠れない夜に眠れないことが周りの女房達に気付かれたら心配を掛けるからと寝返りを打たなかったことが、病気の発症を早め、光源氏を悲しませたとしたら、寝返りを打った方が良かった。しかし、紫式部が最も尊重した美学が須磨第9段落と若菜上第35段落であるということは、『紫式部日記』を通読してみても、明らかである²⁵。

雀の子をいぬきが逃がした程度のことでも目を真っ赤にして泣いてしまい、遠くから垣間見している人間にも見て取れるほどくやしさが顔に現れる十歳の少女を書いた時、柱隠れに涙を紛らわす十八歳の淑女を、作者は思い描いていたのではなからうか。

注

- 1 「本文の世界と物語の世界」。『源氏物語研究集成』第一三卷（風間書房、二〇〇〇年）
- 2 『富山大学文学部叢書Ⅱ 人文知のカレイドスコープ』（桂書房、二〇一九年）
- 3 光文社古典新訳文庫『狭き門』二二七頁。ジッド全集所収本二二六頁一六〇一八行目までが、古典文庫本の訳の意になることを確認している。初出では、二七五頁一一〇一三行目であるが、ジッド全集所収本二二六頁一六〇一八行目と同文。
- 4 「新出「若紫」巻の本文と巻末付載「奥入」―定家監督書写四半本『源氏物語』との関係を中心に」。『中古文学』第一〇六号（二〇二〇年）所収。拙稿「義経記」巻七の改竄統紹―『義経記』巻七を中心に」。『富山大学文学部紀要』第六七号（二〇一七年）所収。なお、この拙稿で、小矢部川と書くべきところを庄川と書いてしまった。記して、訂正とお詫びを申し上げます。
- 5 『文学・語学』第一四八号（おうふう、一九九五年）
- 6 至文堂。一九九九年。
- 7 例えば、綿矢りさ『ひらいて』（新潮文庫、二〇一五年。初出は二〇一二年）の四二頁以降。
- 8 『国文学解釈と鑑賞』第四八巻第一〇号。一九八三年。
- 9 『源氏随攷』（晃文社、一九四二年）所収「橋姫巻」扇ならでこれでも月は招きつばかりけり」の釈。
- 10 『源氏物語の構造』（桜楓社、一九六六年）Ⅱ五。
- 11 『源氏物語の構造第二』（赤尾照文堂、一九七一年）
- 12 中野幸一氏『物語文学論攷』（教育出版センター、一九七一年）Ⅰ三。
- 13 拙稿「かの十六夜の女君―葵巻晩秋の新解釈」。『中古文学』第四七号（一九九一年）所収。
- 14 角川書店、一九六六年。
- 15 岩波文庫『源氏物語』第一巻（二〇一七年）。
- 16 藤村潔氏『古代物語研究序説』。笠間書院、一九七七年。
- 17 風間書房、一九九四年。
- 18 笠間書院、一九九四年。
- 19 中央公論新社、二〇一二年。
- 20 「光源氏物語現行形態試論第三―後期巻々を中心に」。『富山大学文学部紀要』第一九号（一九九三年）三四二―三四〇頁。
- 21 野口元大氏も、『うつほ物語』と『源氏物語』前編と、二つの長編物語の大尾に注目なさっている。「源氏物語が竹取・宇津保から受けたもの」『国文学解釈と鑑賞』昭和四三年五月号。「物語の結取―『うつほ物語』「楼の上」を中心に」『国文学解釈と教材の研究』平成一〇年二月号。

- 22 「光源氏物語現行形態試論第七―長編始發説の意義―」。『富山大学人文学部紀要』第三六号（二〇〇二年）一六九―一六三頁。
 23 言い古されたことであろうが、第二七段に、「心ときめきするもの 雀の子飼、」とある。（新編日本古典文学全集『枕草子』）
 24 「光源氏物語現行形態試論第七―長編始發説の意義―」。『富山大学人文学部紀要』第三六号一六九―一六七頁。
 25 「光源氏物語現行形態試論第七―長編始發説の意義―」。『富山大学人文学部紀要』第三六号一六五頁。

〔二〇二一年九月二四日提出〕

